

福生市内の商店調査の感想

山崎 克美

一年半程前、福生市内の商店調査に携わらせて頂いた。普段は市史編纂とは縁もゆかりもない電子工学の勉強をしている私が、このような市史研究誌に文章を書いているのか、とも思ったが、この調査から得た感想などを書かせて頂くことにした。

商店調査の一環として私が行なったことは市内のどの地域に、どのような種類の店舗がどれほど存在しているかを調べるものであった。市内をいくつかのプロットに分けて、その各々について、業種別に集計していき、最後に全部を加えあわせて、店舗総数とその内訳けを得たのである。

この調査は、ちょっと考えると、地図や電話帳を見てやった方が早いのでは、と思われるかもしれないが、それだとう

うしても今現在のデータというわけにはいかない。地図や電話帳が発行された後に開店・閉店した店があるかもしれないからである。そこで、実地調査ということで、市内のあちこちを調べて回ったのである。ところが、そういう風にしても、人手不足だったのかもしれないが、調査にかからない開・閉店があったりして、改めて人の動きの激しいことを感じた。

やはり最も店舗の密度が高いのは駅前周辺とそれにつながる商店街であった。ただしこれには2種類あって、一つは昼間普通に営業している、ごくありふれた商店街という風景である。買い物客などで非常に賑やかである。もう一つは、福生駅と東福生駅の間くらいにある、バーやキャバレー等の密集地域である。この辺はおそらく消防法などお構いなしと

いった感じで、それこそぎっしりと店が並んでいる。営業の性格上、昼間は閉まっているものが多く、通人も人や車は疎らである。あまり細々しているため、チェックに一苦労したところでもある。

こういった地域を離れると店舗密度が段々減ってくる。そして、保険代理店であるとか、各種機器メーカーの販売店といったものが目立つようになる。実を言うとこの辺は店舗として扱っていいのかわるか迷ったところで、一見すると店に見えなくても店とついているので勘定に入れた。似たようなところで(似てないか?)設計事務所とか会計事務所とかいうのも勘定に入れてしまったので、もしこれは不適当だと言うならば、店舗総数の結果がまた少し違ったものになる。集計する際に、店の種類をおおまかにいくつかに分類して、その中をさらに細かく分類する方法をとったのだが、どう考えても、新しい業種としての枠組を考えないとしっかりこないというのもあった。その最もよい例は、ハンバーガーショップやアイスクリームの店といったぐいのものである。大きな分類上はとり

あえず飲食店に含ませたが、その下の分類で扱いに悩んだ。厳密に言えば食堂と同じだが、雰囲気からすると食堂とはまた別格のものである。そこで新しく、「ファーストフード」というのを設けて、そこに繰り入れることにした(名称については異議あるかもしれませんが、あしからず)。このような事は、個人のニーズにあわせた業種の多様化が進むと思われる、昨今から未来にかけて多く生じる事のような気がする。

どのブロックでも、業種別の店舗数は、多少の差はあるけれども、まあ大体似たような度数分布をしているように思えた。特に多いと感じたのは、喫茶店や食堂、それと美容院である。ブロックは私が全く任意に分割したのだが、そのどのブロックでも、この業種が大体一番多いのである。偶然なのか、とにかくうまく分布しているものだと思った。

この調査を行なったとき、私は自転車です市内をあちこち走り回った。地図のコピーと、赤のボールペンを持ってである。こういう調査では自転車は非常に便利な「足」である。車やバイクなどではない

が、ある程度満足のいく速さで移動できるし、何ととっても駐輪に際して気軽に、場所をとらない。その性格は銀座通りや駅前通りでよく現われた。あのように往來の激しいところでは自転車が一番だと思う。

今回この調査を行なったことで今までよりも少しは多くのことを知ることができたと思う。「こんな所にこんな店が」というような新しい発見もあり、単に商

市史編纂に携わって

はじめに

私が、福生市史の編纂の仕事を始めたのは、大学一年の夏でした。その頃から、はや四年が過ぎようとしています。四年間とはいいいましても、春と夏の長期の休

店調査をするだけで商店として扱うべき範囲の定義まで考えねばならないこともあり、見た目より奥深いものがあると感じ入った次第である。

最後に、御指導頂いた川鍋先生をはじめとして、御協力頂いた関係者の皆様に深く感謝致します。

(やまぎき・かつみ 福生市史調査員 福生在住)

山岸 るみ

暇を利用してですから、それ程多くの仕事をしてきたとは言えません。

しかし、それぞれの仕事には、それなりの思い入れがありましたし、様々な人々との出逢いには、たくさんの想い出があります。こういった、市史編纂の仕事

を通じて、私が感じてきたことを、書きつづっていきたいと思います。

市史編纂に携わって

市史編纂のお手伝いのお話をいただいた時、正直なところ、とまどいました。大学では、英米文学が専門でしたので、畑違いの歴史の仕事などできるのか。とはいいまでも、興味がなかったわけではありません。とにかく、興味半分、不安半分で始まった仕事でした。

この仕事を紹介してくださったのは、私が中学校二、三年の頃の担任でいらした川鍋幸三郎先生でした。川鍋先生は、福生市史の中でも現代史を担当していらしたので、私もおのずと現代史に関する仕事につくことになったのです。

私の仕事は、昭和四十七年から五十七年までの農家台帳をもとに、田んぼや畑などのそれぞれの面積を、町会別に集計していくという、町会別農家台帳を作ることに始まりました。また、近年に至るまでの十数年間の事務報告書から、市議会においてどんなことが議案としてとりあげられ話し合われているのか、その処

理状況を調べる作業、そして昭和二十七年から昭和六十年までの市勢統計を資料に、上下水道の普及状況、市道の舗装面積、社会福祉の進み具合、市内の幼稚園、保育園、小学校、中学校の生徒・教員数や校費、進路状況、また、市の財政状況、工業、商業、農業の状態、さらに、テレビの普及状況に至るまで、市民をとり囲む生活環境の移り変わりを調べる作業もしてきました。

その他、昭和五十八年度から六十年年度の三年分の住民異動届のなから、転入、転出、転居（市内移動のこと）の前後の住所と男女別の人数を抜き出し、それを町会別に分け、さらに月ごとの集計を出すという作業もしました。集計の際に、少しでも気を抜くと、町会別に分けた後に足したものの合計と、町会別にする前の市全体の異動数の合計とが合わなくなることがあり、そういった時は、集計を最初からやり直さなければなりません。また、届け出た日ではなく、実際の異動日で調べましたので、他の月からの追加分としてつけ加えたこともしばしばあり、慣れるまでは、四苦八苦の状態が続き

ました。それが、三年分、つまり、三十六ヶ月分あるのですから、長期間かかってしまいましたし、また、私が担当した仕事の中では、最も忍耐の必要な仕事だったと思います。

私が担当した仕事のうち、身近に感じ、また、やっていて最も楽しかったのが「広報ふっさ」の仕事です。もちろん、私が記事を書いたり、編集にあたったというわけではありません。昭和五十四年に「広報ふっさ」の第二百零発刊を記念して、「広報ふっさ」縮刷版が発行されていたのですが、その縮刷版を使って、号ごとにどんなことを重点においているかということながめていく仕事です。

創刊号は、昭和三十二年九月五日発行となつていますから、今までで、かれこれ三十年以上も発行されていることになります。その三十年間で、「広報ふっさ」（昭和三十八年四月十五日発行の三十二号までは「福生町広報」でした）にはどういった記事が載せられ、また、福生にとってどのような役割を果たしているのか、見ていきたいと思つています。

発行される時期に応じて、いわゆる市

の諸機関からの「お知らせ」が載せられているのはもちろんですが、市民から寄せられた声、つまり、要望や、身近に発見した出来事を紹介した欄も多くもつけられており、その当時の話題や、市民の関心事がうかがえます。また、区画整理、市道の舗装工事、市民体育館や福祉会館、市民会館などが建てられて、市内の公共施設が充実されていく様子、人口が増えるにつれて、小・中学校、家屋、団地などが増設されていく過程が、図や写真を用いるなどして、分かり易く示されています。

このような、今となっては当然のものとして使われているものも、あらゆる過程を経て出来上がったものなのだ、ということがよく分かります。ちなみに、夏の福生の七夕祭りには欠かせない、市民にはおなじみの「福生音頭」が出来た時のことも記事になっています。

私が、小学校五年生の頃だったと思いますが、(昭和五十一年か五十二年頃だったと思います)、福生の多摩川沿いを舞台にして制作された「アフリカの鳥」という映画を観た覚えがあります。このことからわかるように、福生には野鳥

が多いのでしょうか、「ふっさの野鳥」と題して、何回かに渡って、かつては、シリーズで連載されていました。その他、横田基地と福生のかかわり方もシリーズになっていますが、騒音問題のみに焦点をあてるのではなく、何らかの交流をもつて活動する機会があることも書かれており、市民が、横田基地の存在に対して、必ずしも反感ばかりを抱いていたわけではないということが分かり、私にとっては新たな発見でした。

「広報ふっさ」は、市の諸機関からのお知らせや、その時代に話題となつていくことだけが記事になるのではなく、市内にある橋の名前や地名などの由来や、その昔から言い伝えられてきた昔話なども連載されているのです。全国的に知られている、といったものがあるわけではありませんが、自分の地域の生活に密着しているもの由来や昔話であるため、大変身近なものとして受け入れることができ、また、いつも考えてはいないにしても、何かの折に思い出し、不思議に感じていたもの、例えば、一風変わった地名の由来などの謎が解けることもし

ばしばあると思うのです。

このように、市民(町民)にとって身近な話題が多く、写真も豊富なため、町内、あるいは市内の風景や人々の様子が時代ごとに移り変っていく過程がよく分かります。同じ場所の写真を時代を追って並べることによって、昔の様子を知る人にとっては、昔を懐かしむ機会ができ、また、知らない人にとっては、昔の様子を知る良い機会となるのです。

この時期は、都市化が叫ばれる中で、昭和四十三年六月に都市計画が国会で成立したこと、そして、昭和四十五年七月一日に市政が施行されたことなどを契機に、福生が急激に変化していく時期であり、「広報ふっさ」は、そういった変化を市民にわかり易く、そして適格に伝える役目になってきたものだと思うのです。市民の声と、数々の写真でつづった福生の一つの現代史といっても決して過言ではないと言えるのではないのでしょうか。

私達の仕事場は、福生商工会ビルにある市史編纂室です。そこでは、現代史担当の方だけでなく、近世史について勉強

されている方々と御一緒することも多く、色々なことを教えていただきました。その方達の主な仕事は、福生に代々伝わるいわゆる〇〇家古文書や、寺院・神社に保管されている、昔に書かれてそのままの形で残されている資料を解説していく作業です。資料の中には、昔に描かれた福生の地図や、美しい絵巻などもあり、そういうものは、歴史の教科書に載っているもの、あるいは、美術館で展示されているもの、と思い込んでいた私には、大変印象的でした。また、ある寺院で、客をもてなした時や正月時の献立が、これと細かに記されているものもありました。もともと、お寺では、精進料理に代表されるように、質素な食事が多いと思うのですが、客をもてなしたり、正月の時には、それなりのごちそうを用意していた様子がうかがえます。この他にも、福生地区の長い歴史を物語るものをいろいろと見せていただきましたが、こういうものに直接触れることによって、私にとって歴史というものは教科書に収められているような、ある種の化石化されているもの、という考え方から、もっと身近な

ものなんだ、という考え方に変わったように思うのです。

自分の担当した現代史と、ほんのわずかではありますが、近世史をかいま見ることによって、福生というこの小さな町にも、長い間につちかわれてきた歴史がある、ということを変更して認識することができたと思います。また、歴史は、自分の専門分野とは違う、という偏狭な考え方を持っていた私には、少しでも視野を広げ、また、自分の住む地域について考え直すためにも、良い経験をさせていただいた、と嬉しく思っています。

おわりに

この原稿を書きながら、ずっと考えていたことなのですが……、もし、福生市史の編纂の仕事をしていなかったら、また、もし、こうやって書く機会をいただくことがなかったら、きっと私は、福生について、あるいは福生と自分を結びつけて考えることなどしなかったと思うのです。こういう機会をいただくことによって、少しでも福生の歴史について興味

を持つようになったこと、様々な方々と出逢うことができたことは、私にとって貴重な経験になったと思います。

最後になりましたが、川鍋先生をはじめ、関係者の皆様、長い間御指導いただきました。ありがとうございました。

(やまぎし・るみ 福生市史調査員 熊川在住)